

さらに、現代の読者に創世記二二章の「モリヤ」がどのような機能を果たしているかを考察した。その結果、創世記二二章において地名モリヤは、きわめて技巧的な語呂合わせを形成し、しかもそれによって創世記二二章の「見る」と「畏れる」という混乱／混同をまとめる機能を有している。さらに、アブラハムの生涯においてきわめて重要な物語を特別な場所で行われたとして創世記二二章の記事を特別視させる一方で、同時にこのモリヤの意味がまったく意味が不確かであるので、全く虚構の地名だとも考えさせ、さらには物語の記事の内容を疑わせるといふ、文学的機能を有している。

以上、古代語訳および、創世記二二章と歴代誌の記述やエルサレムとの関係について確認し、それらをもとに文学的機能について考察してきた。創世記二二章において重要な動詞である「見る」や「畏れる」とモリヤとの間に、発音上の類似が存在し、それらが巧みな言葉遊びを形成していた。その結果、創世記二二章の重要な語句を統合させる機能を有していた。さらに、物語を特別な場所で行われたものにする事で、創世記二二章の記事を特別なものにする一方、創世記二二章において重要な場面設定であるはずのモリヤの位置や意味が不明瞭で曖昧なため、結果的に物語の内容にも疑問を抱かせる機能をも有している。このように、創世記二二章において地名モリヤはきわめて重要で多様な文学的機能を有しており、現代の読者はこの地名モリヤによって、単なる場面設定や位置の確定に留まらない大きな影響を、創世記二二章の読みに受けているのである。

語られた言葉と書かれた言葉

——ブーバーのサムエル記解釈より——

堀川 敏寛

聖書言語の言語性を主題とする際、それはわれわれの手に存する書物としての所与の「書かれた言葉」に限定され得ない。聖書には、聖なる存在である神によって「語られた言葉」が含まれ、それは預言者を通して人間世界に伝達されたものである。マルティン・ブーバーは、『サムエルとアガク』(一九六〇)の中で、自らの生の様式一切を敬虔な伝統に従わせる律法に忠実なユダヤ人との対話について報告している。話の主題は、サウル王が外敵であるアマレク人の王アガクを殺さずに見逃したという理由で、預言者サムエルが「サウルの王国支配は奪い去られるであろう」という神の使信を伝達したサムエル記上十五章であった。この律法に忠実な男は、聖書テキストにおいて書かれた内容を、字義通りに理解した。つまり神が異教徒の王を殺すよう命じたことを、疑いなく信じた。他方、ブーバーは「これが神の使信であると、私は決して信じていることができませんでした。……私はサムエルが神を誤解したのだと信じます」と、聖書テキストそれ自体が既に誤って伝達されている可能性がある、と考えた。

ブーバーは、このサムエル記上の解釈をもとに、神の掟と人間の規則との混同、神の声とそれをおこす人間の筆との食い違い、受け入れられた声と作られたテキストとのずれから誤解が生じる可能性があると考えた。更に彼は「われわれは理解と誤解とを分離、区別するいかなる客観的基準も持ち合わせない。

われわれは—もし持っているとすれば—ただ信仰を持つのみである」と述べる。ヘブライ語で信仰を意味するエムナーは、ギリシア語化されたピステイスのように、真であると認める信念ではなく、むしろ直接的な「信頼」を意味する。したがって読み手の恣意的解釈が意図されている訳ではなく、語られた言葉側の「聞く人を求めてつかもととする」働きと、見、聴き、感じるものに対して誠に向き合う読み手側の「応答する責任性」とが合致してこそ、ブーバーがエムナーとして理解した両者の信頼関係が築かれると言えよう。テキストに「汝」として向き合い、語りかけに対する受容的態度を通して、言葉との出会いは可能になる。これがブーバー「我―汝」哲学における「関わり相互性」である。その「我―汝」の関わりによって、預言者の誤解を突破し、根源的な神の使信と出会う、とブーバーは主張するのである。

彼のヘブライ語聖書言語論における独自性は、聖書テキストの中で描写されている神の言葉が、既に預言者によって人間の言葉として告知されたものと捉え、聖書言語が誤解の産物であり得ると理解する点にある。したがってブーバーは、聖書テキストを字義通りに受け入れる客観性を重視する道を進むことはなく、また反対に聖書テキストを読み手主導で解釈する主観性を重視する道を進むこともない。それはヘブライ語聖書における「書かれた言葉」の信憑性を不確かなものと考え、そのためである。彼にとって手元に存在している聖書テキストは、目指すものへと到るための手段であって、目的ではない。如何にして「語られた言葉」と出会うか、これがブーバーにとっての最

重要課題であった。だからこそ彼は「書かれた聖書」という媒介を経て、「神によって語られた声」の読み手への歩み寄りとして、それに向き合い、受け入れる責任を果たす読み手との「我―汝」関係によって、この課題に取り組んだ。それによって「可能態であった聖書テキスト」から、「現実態としての神の使信」を生起させることを目指したのである。それはテキストを記号や象徴として分析する、解釈者からの一方通行的な我―それ態度では実現しえない事態である。まさにこれは読み手と「語られた言葉」との信頼関係を通して、「書かれた言葉」に含まれる預言者の誤解を乗り越えようとする、ブーバーの試みだったのである。

「ヨシヤの改革」と聖書外資料

高橋 優子

紀元前七世紀後半に、いわゆる原申命記に基づいて行われたと考えられている「ヨシヤの改革」は、聖書資料を一次資料として再構成されることが多かった。しかし現在では、利用可能な考古資料についての研究が進み、聖書外資料すなわち考古資料を一次資料、聖書資料を二次資料として当該改革にアプローチすることが可能となっている。「ヨシヤの改革」についてもっとも重要な考古資料は、メツアド・ハシャブヤフと呼ばれる砦の遺跡から得られる情報である。ここではこの遺跡に注目して、「ヨシヤの改革」の時代背景を探りたい。

この遺跡からの出土品のうち、われわれの関心にとってとくに重要なのは、大量の東ギリシア土器や砦の構造といった物質